

【翻 訳】

1948年から1970年までの
マンチェスター大学平和学専攻の学生達のための
教育ならびにキャリア開発について
(マンチェスター大学 アレン・C・ディーター博士) (3)

片 岡 徹

翻 訳

1948年から1970年までのマンチェスター大学平和学専攻の 学生達のための教育ならびにキャリア開発について (マンチェスター大学 アレン・C・ディーター博士) (3)

片 岡 徹

目次

1. 平和学プログラムの説明
(Description of the Peace
Studies Program)
2. 学修法について
(Approach of the Study)
3. 1948年～1953年：形成期
(The Formulative Period)
(以上, 前々号 (1))
4. 1953年～1959年：強化期
(The Period of Consolidation)
5. 1959年～1965年：不安定期
(The Period of Uncertainty)
(以上, 前号 (2))
6. 1965年～1970年：再建期
(The Period of Rebuilding)
7. 未来への提言
(Recommendations for the
Future)
8. 結論 (Conclusions)
(以上, 本号 (3))

[要旨]

本稿は、前々号、前号に引き続きアレン・C・ディーター博士による報告書の翻訳であり、今回扱う時期は、マンチェスター大学の平和学プログラムにとって「再建の時期」に当たる。そして、現在（2019年）も続く本プログラムの基本的な哲学や方向性は、この時期の熟議に基づいていると言える。なお、この原本は米国マンチェスター大学図書館アーカイブ室に保管されている。

6. 1965年～1970年：再建期

1963年から65年にかけてなされた修正は、1965年度における科目の中で反映された。その後も修正が少々続いたが、しかし主たる変更点は平和学において提供する科目のより大幅な秩序立てであった。少なくとも21名の学生達は2ないしは3つ以上の科目を取り、そして9名がこの時期に平和学専攻として終了している。別の6名は現在平和学専攻として登録をしており、その中の1名

は翌年1月に平和学専攻として学びを終える予定である。その他5名の平和学専攻の学生達は1969年ないしは1970年に卒業するため、職業上または教育上の経験を蓄積するには十分な時間を有していないと言える。その内の2名はかつて軍隊に従事をしており、1名は専攻前に、もう1名は専攻後であった。数名は現在大学院におり、専門は社会学、歴史学、そしてロシア研究である。1名はこの秋に進学する予定ではあるが、平和学専攻として卒業した18名の内2名だけが神学校へ

進んでいる。1名はVISTA (Volunteers in Service to America) でボランティア経験を積み、4名は海外の教会でボランティアの奉仕をした。その内訳は1名がベトナム、3名がアフリカである。ある者は社会変革に関する特別プログラムがある大学院へと進学し、研究領域として黒人居住区を選んだ。また、ある中国人の難民は平和学の分野で大学院生となり、中国本土における政治や宗教に関する研究者として仕事をするために香港に戻った。

12名の回答者の中で、ある1つの科目だけが他の5科目よりも多く履修されており、それが8名の履修があった『紛争解決 (Conflict Resolution)』であった。4名が『紛争解決 (対人間・対集団間)』と『言語と思考 (Language and Thought)』が最も優れている科目であるとみなしていた。ある者は3年生の時にドイツのマールブルク大学 (Marburg University) で1956年のスエズ危機を扱う『危機管理 (Crisis Management)』の科目を履修した。彼はこの科目を大変素晴らしい科目であると感じ、マンチェスター大学における演習特講 (special seminars) のためのモデルとなると感じた。この時期のグループは、地域研究や従来の平和学の科目にはこだわらない平和に関する領域から幅広い科目を履修しており、そのことが平和学プログラムにとって適切であると高く評価をしていた。

数多くの科目が変更され、そして平和学プログラムの全体像もミューア教授による特徴を失った異なるアプローチを採用していたので、それに関する学生達の全体的な反応を理解するためにも何名かの学生のコメントが役に立つかもしれない。ヨーロッパで育ち、大学の中盤頃までヨーロッパで教育を受けたある平和学専攻の学生は、以下のように述べている。

「私が履修した科目群の中心は、そのほとんどが非歴史系であり、そしてとても曖昧な哲学系の科目だけでした。私が出会った実用主義的な政治学によるアプローチは、私にとっては新鮮で、私の傾倒はより思索的になりつつありました。私は新しい考え方や情報、そしてアプローチを歓迎していました。なぜならば、新しいものの見方を開花させてくれたからです。しかしながら、最終的に大学院において私は自らの考え方により近い領域に従事することにしました (現代言語と文学)。ただ、私は多くの貴重な考え方や概念を保持しており、そしてそれらを自らの思考パターンに組み込んでいると思います。」

現在はアフリカで働いている別の卒業生は、このように述べている。

「恐らくは大学の教育から私が最も価値があると考えられることは、人との関係性に加えて、新たな気づきとそれゆえに人々や私の隣や世界に横たわる諸問題へのより大きな関心 (a new awareness and therefore greater concern for people and problems next to me and throughout the world) です。紛争解決 (対人間・対集団間) も大いに役立ちましたが、しかし社会学の科目が特に私にとって役に立ちました。私達は、ほとんどの時間を若者達と共に働いています。私達が生き方としての非暴力について人々と討論をする多くの場合、これらの科目から吸収した考え方や事実を呼び起こすことが役立っています。若者や紛争を扱うという重要性を感じている他者と一緒に話をする際には、何度も何度もそれが紛争解決の授業で考えてきたことだと感じているのです。」

武装した黒人居住区の中で暮らし、共に研究を進めてきた教育ならびに社会福祉の領域で経験を持つある者にとって、平和学の全体

的な影響は以下の通りであった。

「平和学プログラムは、私のものとは異なる理想や価値に対して開放的な姿勢を取ることを励まし、そして私のそれまでの人生における経験と見識を強めました。私はその雰囲気、人がある型にはまっているので価値があるというよりは、むしろ一人ひとりがユニークな個人として価値を有するがゆえに価値がある、と感じました。そのことが、私自身の考え方に価値があると認識をする一方で、私と異なる人々を敬うことに役立ちました。私は、このことが隣人と平和に暮らす際に欠かすことが出来ない必要なこと (a necessary prerequisite) であると考えます。私は平和学に関係する幾つかの科目を通して、より創造的になることが出来たように感じます。携わっていた教授達はより開放的な姿勢とより誠実な知的探究 (more openness and honest intellectual inquiry) を激励していたように感じました。」

非行少年のための私立学校で働いている卒業生は、以下のように述べている。

「平和学は、人生に対する神学的、そして歴史的視点が重要であり、そして不可欠なものであること、そして平和を作り出す者になるためには私の心を最大限に活用することが必要であるということを理解するのに役立ちました。平和学は私の平和に関する概念を拡大し、そしてどの場面においても私が潜在的な役割を果たすことに思いを馳せることが出来たのです。そして平和ないしは和解と言っても良いかもしれませんが、作り出そうと努力するようになりました。学内における教授達や学生達との個人的な関係は、この隣人を意識するという概念 (neighbor-conscious concept) を高めたように思います。」

このような反応を見て分かるように、平和学プログラムが多様な影響を様々な学生達に与えていたことは明らかである。しかし、このグループは、学生達が感じた考え方や取り組みの中から自ら選んでいたという点で高い自由度があったと感じていたようである。学生達の説明によれば、このグループの多くは当初から絶対平和主義者 (pacifists) であったり後にそうなったりしたようだが、どのような立場や主義であれ、各々の考え方を持っていたり発展させていたり、やはり高い自由度があったように思われる。絶対平和主義者でもなく、その後もそうあり続けた学生や平和学専攻の割合が高かったのもこのグループの特徴であるように思われる。実際には、このグループの半数近くが絶対平和主義者ではなく、またはどちらかといえばそうではなかった。

数としては少ないが、このグループで表れる批判は、面談の失敗やインドクトリネーションへの傾向に焦点が当たっていたことではなく (初期のグループでもそう感じていた人が少しいたが)、むしろある種の学問的、そして歴史的な幅や深さの欠落 (some lack of academic or historical breadth or depth) であった。これは単にこのグループでは必修科目が少なく、そして別の領域でも専攻出来る機会があったからかもしれない。しかしまた、私達はこの時期は数多くの科目が若い教員によって教えられていたことも覚えておかなければならない。学生達の多くは平和学に心動かされていたのであるが、その理由の一つが興味や関心に依じて様々な科目を履修できる機会があったためでもあった。ある平和学専攻の学生は、古代史や古典に関する科目がないことは、彼女が初期のプログラムと比較して損失 (a loss) であると示唆していた。彼女はまた、現在のプログラムは統合や結合 (cohesion and unity) の要素を欠いており、恐らくは「自分流でする」とい

うように学生達に過度とも言える機会を与えていると述べていた。しかしながら、彼女はこのことこそが平和学に元々は魅了された理由であることだと認めてもいた。彼女は平和における科学の役割に関して考察してみたいとも思っていたのである。彼女によれば、平和学に関心がある科学分野の教授は効果的に活用されておらず、特に会議や演習に参加していた学生達にとってそうであったと感じていた。彼女は2年半平和学プログラムのアシスタントとして仕えていたこともあるため、そのコメントは平和学プログラムやその方向性を一般的に知っている者以上の実態を反映していると考えられる。

このグループにおける数多くの異なる教員達との日常における直接的な交流がとても重要であったと言える。集中的な面談が個人的な問題に役立ったと感じている人もいた一方で、初期のグループでは少し見られたのだが、このグループの学生達は不十分な面談や誤った指導による手助けのために平和学プログラムを批判する、という傾向は示さなかった。

12名の中で11名が平和学の科目を取るよう勧めると回答していた。また、数名は他の領域の専攻はつまらなかったものの、平和学での学びは、平和の問題への準備として重要であり役立ったと述べていた。8名は平和学を他の領域の専攻と組み合わせることを勧めていた。一人はスタッフが限られているので勧めない、と述べていた。

12名による回答の中で5名が職業や大学院進学に関する導きに感謝していた。2名は、助けは求めなかったものの、しかし有効的であると知っていたと述べていた。7名は自らの職業決定が平和学から影響を受けており、その中でも多くは「とても強く」影響を受けたと示唆していた。

誰も『文化史』や『平和創造』に関する科目における昔ながらの講読科目に相当するような科目を履修していなかったが、全般的に

個々の読書や平和学以外の科目で取り上げられた科目において、これらの科目の中で扱われた幾つかの教材とは驚くべき親和性が見られた。8名がガンジー、シュバイツァー、キング牧師、トルストイ、プラトンや色々な古典作品など、かつての平和学の科目で必須の読書課題であったものについて読んだと述べていた。しかしながら、これらの、または他の作品については、初期のプログラムにおいて平和学の学生達によって印象に残っている作品数と比較して、とても良かったものとしてはほとんど言及されなかった。第1、そして第2グループと対照的に第3グループで幾分か見られるように、これはより実践中心的で、そして学問的にはさほど動機づけをされなかったグループであるという印象を持つのである。学生達の情熱は、より狭いという意味合いで教会活動や宗教的な関心事ということよりは、むしろ行動や個人的な政治的、社会的な関わりに向けて動き出す傾向があったのである。ほとんど個人的な宗教に関する感情や正統派キリスト教徒としての信念がこれらの回答用紙には表れておらず、しかしその一方で、第1グループと、そしてやや程度は低くなるが、数多くそれらの表明が見られるのである。平和学プログラムから影響を受けて築かれた人生哲学に関する質問については、このグループは初期のグループよりも少ない回答であった。これは、このグループにおける価値観や人生において何を大切にするかという意味でより哲学的ではない気分を表し、そしてより強い世俗性を表しているだろう。言うまでもなく、平和学プログラムの有用性に関してはとても前向きな言及が見られるのである。これらについて、平和学専攻、平和学専攻ではなかった別の学生達によるコメントを見ることで考えてみたい。

「私は平和学プログラムのおかげで本当に自分自身をさらけ出すことが出来たと感じている

ます。私は存在している諸問題についてより実際に意識するようになりましたが、しかし個人的には以前ほど深くは私に影響を与えていないように思います。私の価値観は変わりませんでした。しかし強化され、そしてより明確になりました。私はより関わるようになり、そして献身的になったのです。」

「大部分において、平和学は対人間の関係という力学を理解する際に役立ちました。教授達は大変優れた聴き手でした。私は、かつては他の人が言っていることを聞くことが出来なかったのですが、今では口論がめったに起こらなくなったことにあるように、以前よりも他人の話聞くようになり、そしてよりコミュニケーションを取るようになったと感じます。」

「平和学の教授達は、人間の状況において客観性を実現するという点に関して、前向きに「問題解決」の限界について認めていたように見えました。教育者というのは「発見型アプローチ」を崇拝するというのが私の意見です。私が初等教育で習った言葉の奥にある意味を理解するという事は難しいことでした。平和学の科目との出会いは、私が人間とは多くの諸問題に対して「答え」なしに生きていかなければならない（one must live without “the answers”）と理解するのに役立ちました。私は聖戦が要求するような大義があるとは言わないほうです。平和学の科目と教授達という組み合わせが、私が人々は各々の客観性において厳しく限定されているという、人生の複雑さを理解することに役立ちました。この科目の中で取り上げられた疑問は、恐らくは私の生涯を通して私を「悩ます」（“bug”）でしょう。私は自らの人生において、もっと個人的な成功のため、または物質的な富の集積のために時間を費やす必要があるのでしょうか。または、仕事や財産、

もしかすると人生を犠牲にしてさえも他者が求めているもののために仕えるために時間を費やす必要があるのでしょうか。どのように人は自己中心主義（ethnocentrism）を認識するのでしょうか。どのように人は幻滅されずに民主主義の目的を追求するのでしょうか。このような問いとの出会いがなければ、私の現実に関する考え方はもっと単純なものであり、恐らくは他者の考え方に寛容的ではなく理解も少なかったであろう、と感じています。」

これらのコメントの調子は典型的であり、先述したように、最近の学生達の多くと平和学プログラムがそうであるように、実用本位主義、実践中心主義の傾向を再び示している。そして、このグループは宗教的、社会政治的な背景や傾向について最も多様性を有していたのである。

7. 未来への提言

学生達や平和学プログラムの政治的な関わりに関する提言や助言の中で、時期によってほとんど特徴がなかったため、ここで要約することにする。この要約を書いている時期までに集まった60近い回答では、評価や提案事項に関してあるグループは比較的保守的で、別のグループはリベラルで急進的な、というように、一つの傾向としては分類できないような実質的に数多くの相反する提案が見られた。2科目以上の科目を履修する現在の学生で回答用紙を返信していない人も多かったのだが、最近のグループが提案事項において最も急進的であったように思われる。しかし、これは憶測にすぎず、そして私達の回答を裏付けるような確証もない。各時期の数名の学生が、現在の時期の平和学の学生達の急進性にとっても似ているということが印象的である。明らかに、平和学は過激な急進者達、

特に学内の黒人の急進的な学生達への訴えかけを行ってはいない。これは部分的には平和学の学生達や教員達の多くがそうである非暴力、または絶対平和主義への強い働きかけという問題があるかもしれない。回答者の多くは、平和学の科目を履修した時には絶対平和主義者であったと回想している。数少ない学生がマンチェスター大学に在籍中に絶対平和主義者ではなくなったが、しかし大多数はそうではなかった。

59名の回答の中で31名が平和学の学生達と教員達が行動や抗議運動、そしてその他の政治的社会的行動に関わるべきだ、と述べていた。これらは、そのような行動が完全に適切なものであり、そして推奨されるべきであるという不適当な主張であった。別の9名は、特定の行動形態に関して慎重に判断しつつ、学生達と教員達は行動に移すべきであると指摘していた。11名は個々の良心に依るべきであり、その人が関わろうと決めるのか決めないのかに関わらず、尊重されるべきであると主張していた。このように述べていた最も多い数でもある5名は最近の時期のグループからであり、かつ少なくとも1名は各グループに存在していた。2名はよく分からないと述べ、3名は決してそのような行動に関与すべきではないと述べていた。1名は1959年から65年のグループを除いて「否」と述べていたが、それは最も少ない数であり、また回答の趣旨が分からないものでもあった。「否」と述べた人は、抗議活動や行進はもはや有効ではなく、それゆえに家族や学校における平和教育というより静的な方法(quieter methods)が今は求められている、とコメントしていた。ざっと、同じ割合の人が各グループにおいて様々な対応策を述べていた。

「あなたはこの種の関与に教育的な価値を認めますか?」という質問に対して、再び各グループにおいて極めて同じようなパターンの反応が認められた。39名は、そのような

行動への関与から明瞭な教育的恩恵があると指摘していた。別の10名は、より慎重な物言い、「もしもそれが注意深く分析され評価されるのであれば、それは人にとっては価値を有するだろうが、また別の人にとっては危険でもありうるだろう」というような表現をもって好意的な反応を述べていた。そして、教育的な価値に関わらず、「私は決して勧めないでしょう」とも述べていた。1名は教育的な価値はそこには認めないと述べ、3名は明らかに無回答を選んだ。2、3の回答の内容が大変複雑であったので、容易に要約出来ないと判断した。4名は「現実主義」と「幻想を打ち砕くこと」という次元を加えることで真の価値が出てくるだろう、と示唆していた。幾分かは教育的な価値が認められると考えた6名は、平和のために働くためにはより良い方法とより効果的な方法があると示唆していた。3名は、関与は「必須」(a must)であると述べたが、他の4名は必須にしないほうが良いと述べた。別の4名は、それを学生達の「学問的な発展」よりも位置づけを下にすべき(should be subordinated to “academic development”)だと述べた。もしも適切な優先度が保たれるならば多くの価値があると考える1名は、「ある自己的な問題(自らの権利)に関する半ば感情的な集団による行動は、人生をかけてリスクを冒す価値がない」と述べた。

1名は、何名かが感じている行動という問題と学生達の教育的価値という複雑性について以下のように表明していた。

「これは難しい問題です。私は参加者になるという価値を認めます。他方で、私にとって、平和を作り出す者(和解を導く者)は、幾分か将来の見通しを保持し、そして一步距離を置かなければならないように思えるのです。修正がきかないルールなどありません。人はこの種の行動に関して究極的な結果を評価

し、私達が成し遂げたいと希望するものと比較しなければなりません。行動というプロジェクトは単に実験結果として捉えられているのでしょうか、または何を学んできたかということの評価するための教育の産物として捉えられているのでしょうか。私はこの議論をどこへ導けば良いのかあまり分かりません。」

数名は、教会や学校の関係者の間では行進や抗議行動に関して逆効果の性格 (counter-productive character) だと述べていた。1名は、「もしも私達が人々を敵に回し、そしてその人達が私達の行動のために福音のメッセージを拒否するならば、私達は和解に変わって暴力を刺激する (we have stirred up violence instead of reconciliation) と思います」と述べていた。他方で、それよりも多くの回答者が、これは正義と真の教育の両方が「あるシステム」の内部、ないしは外側で行動という関与を要求する時代なのであると示唆していた。1956年のある卒業生は、「この種の経験は本を強制的に読ませることで学ばせるような価値があるのです。これは新しい実験室の経験なのです。それはまた、平和学プログラムが単にあるテーマについて語っているのではなく、紛争解決に関して何かをする、というとても積極的な立証でもあるのです」と述べていた。しかしながら、他の人々は行動を立証に対する良心の呼びかけよりも適切に何か動機を持っているとみなすことを極めて躊躇していた。2名は、そのような行動は人の言行一致と「信念を貫く」(one's integrity and "keep the faith") ことと証明することは重要であると述べた。何を専攻したかは不明だが、ここ10年以上に渡って活動をしている人は、「今日の環境において提供されるより直接的な関わりは、私達の思考や関わり方に関して拍車をかけたことでしょう。次々と続く私の関わりは、私の倫理や神

学、そして社会改革という概念の再考を余儀なくさせています。私の行動は、しばしば私の思考よりも優先され、そして力強い道具として振る舞うのです。このような行動に関する集団での振り返りは重要です。学生達は、活用可能な社会変革の道具や社会的有効性、そして倫理的な限界も考えて取り組まなければなりません」と述べていた。

行動プロジェクトを支援する平和学ということに関連して、回答者は各自の回答にさほど確信を持ってはいなかった。22名は、平和学は行動プロジェクトを支援すべきである、と考えたが、しかしその大多数はある形式の制限は必要だと書いていた。7名はさらにより慎重であり、もしもそれらが積極的なVISTAやクエーカー教徒型のコミュニティ向けの行動プロジェクトならば受け入れ可能であろうと言っていた。ただし、抗議行動は厳しく個人的であるべきで、平和学プログラムによる支援であってはならない、と述べている。かつてプレズレン・ボランティア・サービス (Brethren Volunteer Service) や平和部隊 (Peace Corps) で働き、現在は大学院博士課程で学んでいる人は、以下のように述べている。

「平和学は行動プロジェクトを支援すべきではあるが、一時的に分極化し、または社会の罪を放免し、しかしながら平和学の実際の仕事、つまり共存、変革、和解ですが、を見合わせるような急激で短期的な事柄においては関わり方については慎重であるべきです。プロジェクトは、政策や抗議活動の宣言と同様に、気概のレベルでなくてはならないのです。それらは活発であるべきで、反応的である必要はないのです。」

7名の回答者が、平和学プログラムは絶対に行動プロジェクトを支援すべきではない、

と述べた。7名は答えを持ち合わせてはいなかったのである。他の7名はその質問に対して答えなかった。中には、回答内容の複雑さのために分類が出来なかったものもあった。ある者は、もしも行動プロジェクトが支援されるならば、それらは学生主導であるべきであり、また別のある者は、和解の目的を維持するような非暴力的な手段が常に主たる考慮事項であるべきである、と願っていた。2名は、平和学は交通手段や基本的には個人で実施されるプロジェクトの詳細について調整をすべきであると述べていた。

私達が平和学プログラムの改善のために様々な改善事項に目を向けるならば、極めて多様な示唆に満ちていることに気付く。質問事項が自由に想像しながら提案出来るような方法で形式を作成したため、遠大なものから費用がかかるものの中にはあった。初期の卒業生で平和学プログラムにも継続的に関与している者は、次のように野心的な提案を数多くしている。

1. 充実した奨学金とインターンシップの機会を与えること。
2. 国際関係、地域研究、人口論、そして紛争解決の領域で定期的に客員教授を招聘すること。そして、平和学プログラムを引き受けるような基金を創設すること。
3. 円状の配置となる机やゲストルームを完備した大規模な演習や講義のための講堂を持つ施設を伴うような会議や演習を行うための生涯学習センターを設けること。
4. 様々な平和を中核に置いた職業に関する滞在型の専門家を招聘すること。そうすることで、経験を共有して頂くことが可能となり、滞在型の平和創造者として公式または非公式に教授して頂けるようになる。これは1学期

という長い期間だけではなく、1週間という短期も可能であろう。

5. 学生達に教えるだけではなく、学生達と面談し、そしてインターンシップや会議、研究、出版について、多くの支援を必要とするような学生プロジェクトを含めて調整出来るような専任の平和学プログラム長を任命すること。

6. アンドウリュー・コーディネーター国際情勢・公共政策学部 (Andrew Cordier School of International Affairs and Public Policy) を設置すること。

そして、現在平和学を専攻している者も、このように述べている。

「大学での役割として平和学プログラムに専念出来るようなスタッフを獲得して下さい。さもなければ、大学のスタッフは常に平和学を学びやスケジュール、そして奨学金の面で後退させるでしょう。お金は、教える負担を軽減し、重要で助成金を伴うような研究や出版に集中出来るような著名な研究者を雇うために使われるべきです。中には研究に焦点を置かない大学もありますが、しかしマンチェスター大学には更なる研究が必要です。現在の平和に関する文献やプログラムに関するニュースを含むような、戦争に関心を持つ卒業生向けのニュースレターも発行されるべきです。これは生涯学習に向けた努力でもあるのです。」

別の平和学専攻の学生は、この提案事項については現在実現されつつあるか、または最近実現されたと記しています。にもかかわらず、この学生は更に強化される必要があると感じている。彼は、社会変革プログラムにおけるフィールド活動を課すこと、例えばアジ

ア、アフリカ、南アメリカ、またはヨーロッパでの1年間の海外経験、ワシントンD.Cや国連への現地調査のための訪問、平和に関するグループとの更なる関わり、重要な諸問題について両方の立場を網羅するような議論や話題提供者、を提案している。これらは既になされていたり、これから計画されたり実現出来るように促しているものである。彼は、大学や街という政治的権力構造やその地域における積極的な契約書起草作業、軍隊によるリクルートに関する調査を研究するようなプロジェクトを更に提案している。平和学プログラムやスタッフによるものではないが、全てが過去2年以内に実現されているか、または現在実現されている。

これらの例は、一人ひとりの回答者によって提起された提案事項の幅広さを示している。数名のみが提案事項を書いていなかった。同じような提案事項や似ているような内容が数多くの人によって書かれていた。ここで再度それらについて順を追って要約していきたい。

最も多く言及された関心事は、教育内容の領域であった。関連して7名が勧告事項を述べていた。少なくとも7名の回答者が平和学プログラムを率いるプログラム長ないしは教員という重要な役割について、人によって記述量の濃淡はあるものの考慮していた。先述したように、カリスマ性と教員の学術的能力の両方が、平和学プログラムの過去と未来にとって一般的には大変中核となると考えられていた。数名ははっきりと平和学を最優先にする人が重要であると述べていた。何名かは学際性の強調 (interdisciplinary emphases) は良いが、学生達が自分自身の人生と学びを統合するための手助けが出来るような特別な才能を有する人が必要であると述べていた。ただ、2名はこのような人が必ずしも平和学プログラムの運営者である必要はないと考えていた。それは平和学の科目

を教えている教員の中の誰かで良いかもしれない。少なくとも3名は研究内容の質と平和創造に関する経験が教員を雇う上で重要な考慮すべき事だと述べていた。2名は、平和学プログラムはこれまで教員の研究には力を入れてはこなかったと考えており、また他の者はかなりの偏重が教員にはあると述べていた。1名は定期的に教員が学外の政治的、社会的諸問題やキャンペーンに関わるように調整を図るべきであると提案していた。これは教員の教育内容に現実主義と経験を加えることになるだろう。教員と学生の両方に平和創造においてより具体的な経験を与える方法として、指導を受けながら研究に取り組むための学期を設けることも提案された。1名は、ハイチのような開発が進んでいない地域で1月学期ないしは通常の学期における調査研究の創設を提案していた。少なくとも各時代のグループ1名は深刻なネックとして、平和学の幅広さと客観性の欠如について言及していた。科目に関しては、他の者は多数意見として、更なる学びを継続する学生達にとって顕著な傾向はないとして、全く正反対のことを強調していた。数名は、私達はガルブレイスやコーディネーター、またはヘンリー・キッシンジャーを教員として招くべきであるというような自由な提案を示しているという質問事項によって励まされていた。このような専任のスタッフを提案しなかった多くの者は、私達がそのような研究者達や「学内に滞在する平和創造者」と週単位、または月単位で関わるという恩恵を持てるようにすべきであると提案していた。数名は、平和学プログラムが真の意味で重要なものとなるように大学が十分な財政上の資源を拠出していないと感じていた。数名は、主要な財団や大学の得意先からより積極的な資金確保を提案していた。学生達への財政的な支援や少なくとも数名への奨学金の設立は他の者の関心事であった。特定の平和へのアプローチに関する視野と理解を

広げる客員教授についても 6 名によって推奨されていた。

最大の関心事は、平和学プログラムによるはっきりとしたアイデンティティであった。初期の学生達は、明らかなアイデンティティを感じており、その 24 名のうち 2、3 名を除いては、宗教的、哲学的、個人的、そして絶対平和主義的なイメージに対して好印象を抱いていた。しかしながら、これらは現在の平和学プログラムをそのように分類化されるかについては全く明らかには出来なかった。何名かは、現在の平和学プログラムがかつてのような教員構成ではなく強調点も異なっていると考えて、平和学プログラムを推奨することを躊躇ったり、またはそれに参加したりすることを思いとどまらせようとした。それにもかかわらず、大多数は、かつてのように明確に非暴力であることに関して現在も基本的な継承事項として有効であると考えていた。最近 11 年間の学生達は、平和学プログラムのアプローチやスタイルに関する提案内容についてより多様であったが、それは学生達のより幅広い多様な背景や考え方、そして現在の職業を反映していた。現在そして最近の学生の中には社会で行動を起こすことを平和学プログラムの中核に置くよう促す者もいるが、多くの者達は、スタッフや学生、そして提供される科目という多様性によってもたらされる平和学プログラムに組み込まれる緊張感と様々な考え方を持った幅広い多様な顔を持ったアプローチを提案していた。平和学プログラムのアプローチやアイデンティティについて何かしなければならぬが、しかしどのように平和学プログラム全体の方向性を改善すべきかに関して、ある特定の提案事項から全体的な合意へと進むための傾向をつかむことは難しく、そして合意することはないという数多くの方々による明確な提案もあった。最近の学生達でさえ、現在の平和学プログラムの価値に関して大いに受け止めて

いる、と述べることは公平であろう。2、3 の顕著な例外があるにせよ、これらの提案事項は、車を新しいものに交換したり、またはこの乗り物を使えないものとして一斉に捨て去ったりするというよりはむしろ、エンジンを調整したようなものであった。

私達が平和学プログラムを改善するという段階へと移る時、一連の提案事項は、例えば非暴力、黒人と白人の関係性、感受性、貧困、労働管理に関する争議、現在の世界と国家危機のような様々なトピックにおける特別演習、話し合い、ワークショップやトレーニングのための活動に関する強調点を主要なテーマとして語られてきた。数多くの者はこの種のプログラムが少なくとも学期ごとに一度は実行されて、そして過去 3 年間で実現されていることに気づいている一方で、このプログラムの諸方法が可能な限り多くの授業の中で実施されるべきであるという関心を抱いていた。多くの者は、集団が意見を共有できるような演習形式や少人数の授業がとても重要であると感じていた。授業におけるリラックス出来るような雰囲気と堅苦しくない環境 (a relaxed atmosphere and informality) が数名によって提案されていた。2 名は、様々なアプローチを東ね、そして学生達が学んだ多様性を通してある種の統一感を導く手助けをするためにも、最終年に平和学専攻のための演習を提案していた。1 名は、もしも平和学専攻ではない学生達を引き付ける科目から外れてしまうのであれば、それはすべきではないと述べていた。約 12 名は、より技術的、職業的な方向という点で平和学プログラムが平和学専攻の学生達への貢献というよりも、平和学専攻ではない学生達のために何をやるのが重要であると述べていたり、または暗に示していたりした。数名が、インターンシップや専門的な実地研修を通して特定の職業のために可能な限り準備を大いにすべきであると述べた一方で、大多数は明らかにより現在

の平和学プログラムの強化に価値を置いており、また数多くの学生達が平和学の領域に関連する、しないを問わず、職業として平和創造に関心がありそうな大学院や専門的な学校のために準備をする必要性を認識している。

6名は、平和学プログラムが研究や執筆プロジェクトを支援すべきであると推奨していた。1名は非暴力に関する新しい技術や関わることへの研究が優先されるべきであると述べていた。「現在の機関における変革に影響を及ぼすために、ラルフ・ナダーの概念に関してモデルの研究」が提案された。別の者は、国の歴史を国際的な歴史へと書き換えることについて平和学プログラムの人々が取り組むべきであると提案していた。ほとんどの人が、学術的な内容と平和学プログラムや卒業生に関するニュースの両方を含んだ発行物を励ます平和学研究所の紀要という考え方について支持をしていた。何名かは平和学に関心がありそうな書物のレビューや注釈を付けた紹介を要求していた。2名が、この手段を通して意識的に取り組めるといふ生涯教育の利点を述べていた。1名は平和学の学生達と教員達がチームとなって特別な問題を抱えた学校や教会、市民団体の元へ行くべきだと促した。彼女は、1970年の1月学期に『宗教と戦争 (Religions and War)』という科目を履修していた学生達が中国や現代世界に関して実施した、マンチェスターブレズレン教会での4週間に渡る演習に基づいて提案をしていた。他の者は科目や大学というコミュニティを超えて平和学プログラムの影響力に関するさらなる関心について提案をしていた。

何名かの学生達は、様々な仕事やスキルトレーニングの努力や社会変革プロジェクトを知るため、例えばシカゴの住民組織化に取り組むソウル・アリンスキー (Saul Alinsky) のようなプログラムを見るために緊迫した地域への更なるフィールド調査を力強く促し、または政治のリーダーや政府組織を訪れるこ

とを述べていた。2名は、例えば軍事や黒人活動家のような人の考え方の理解を深めるためにも、より幅広い考え方を持つ様々な人との関りをもっと持つべきであると述べていた。1名は、平和に対する軍事的、政治的アプローチは平和学プログラムの中では十分に扱われてはいないと述べていた。数名は、シミュレーションや実験型の作業がもっと平和学プログラムの中心となるべきであると述べていた。集団の形成過程に関する特別なトレーニングが、何名かの回答者には重要であったようである。1名は、平和学専攻のために私達が目標とすべき最も適している三つの職業は、教育、宗教、そして組織の運営を通じた紛争解決に関する職業であると考えていた。彼は、うえに述べたある種の実験中心型の教育がそのような領域へと進む際に最もふさわしいだろうと言及していた。講義や書物を通してということ以上に経験を通してという、出来るだけ新しい教育上のアプローチを含むような平和学プログラムに関して、多くの感情が表明された。しかしながら、数多くの人はまた科目の学びが意味深いフィールド調査や実験、そしてインターンシップの経験にとっても重要であると促していた。何名かは、伝統的な科目と新たな科目、そして平和学の方法論に関連して、提供される科目の拡充を望んでいた。2名は、学生達がこれまでに書かれている紛争解決や平和の技術に関して知るためにもより高度な統計的、数的ゲーム理論や研究方法への準備が必要だとして、より多くの取り組みが必要だと提起していた。3名は、ペンシルベニア大学の博士課程の平和研究のような、この種の新しいプログラムに注意を払い、そして私達が学生達をこのような方面へ向かうように励ますべきである、と促していた。他の2名は、平和に対する数的なアプローチの重要性に関して疑義を表明していた。

公衆衛生に従事する2名の医者は、これら

の領域、特に予防医学や人口問題への更なる関心を促していた。栄養と健康という問題は、注目されていない重要な領域として強調されていた。また、彼が学生の時に個人の研究として取り組もうと試みたが、しかしそれは平和学プログラムにおいて1年目の平和学専攻だったある学生によって大いに望ましいものとされた。マンチェスター大学における「象牙の塔」のような特質を感じた1、2名の学生による関心は、フィールド調査や実践的な問題解決によって満たされたのであった。

扱う材料の欠乏を克服するためにも、特別な読書が過去に読まれた種類のものへの良い補完となるものとして言及された。例えば、ヘンリー・キッシンジャーによる『選択への必要性』(その学生にとっては、心を揺さぶる経験であった、と述べている)、ガンジーやソローキンなどとバランスを取るために毛沢東による『ゲリラ戦について』などである。2名の平和学専攻の学生達は卒業してから約20年近くが経っているが、大学図書館の一部として、または別の形で平和学図書館と読書室の創設を主張していた。数名は、マンチェスター大学がある地域の中において、平和学の領域で格調高い図書館を持つべきであると述べていた。

3名(または、恐らくは4名)による回答者は、平和学プログラムが現在の方向性やアプローチの中で混乱し、または、過度に普及しているように見えると示唆していた。平和学プログラムと政治学や国際学プログラムと区別をする仕方や宗教的、倫理的な事柄を中心に据えて何が起こったかということについて提起された。ある事例では、このような質問群は、平和学プログラムで学んでいた時に明らかに初期の方向性を見失った人物によって提起された。しかし、今では平和の問題に関して価値を有する動機付けや関心が、平和学プログラムを通して彼にとって利益となったと感じている。数名は、発展の初期の段階

で平和学プログラムによる宗教的、個人的な哲学を中心に据えるという再構築を推奨していた。しかしながら、多くは個人的には平和学プログラムの進化と同じように各々もまた望む方向で進化していると感じており、そしてこのように、こうあるべき、として望ましいものと理解していたり、現在の考え方に合うようなパンフレットを読むことを支持していた。イデオロギー中心というよりはむしろ諸問題に関して、また、厳格に前もって決められたアプローチやキリスト教による敬虔な行為に関して軽減された仮定、というよりはむしろ実用的に、という平和学プログラムの強調することは、全体的な提案事項において回答者の大多数によって望ましいとされた。

集団間や異文化コミュニケーションへの関心やそれを改善する方法が、多くの回答の中で出てきていた。ほとんどの時期においても、これらの領域において回答者達は平和学プログラムとマンチェスター大学の失敗と成功について言及し、そのようなギャップを橋渡しするような意識やスキル、そしてモチベーションを改善する方法を探求していた。平和学プログラムによって構築された理論的な洞察と実践的な経験という両方が、何よりも重要であることが指摘されていた。最近の学生の中には、私達が起こりうる学内の衝突において、暴力への傾向性を調停したり制御したりすることが出来る「監視人達(wardens)」を育てていると主張する者もいた。黒人と白人による緊張や衝突によってもたらされる脅威は、学内外でそのような監視人達が活用可能な有効性としてみなせるような要点である、と回答者によって期待されていた。人間関係や集団形成過程における具体的なスキルは、しばしば他の関心事と関連づけられるような散発的な提案事項の中で数多くの回答者達によって私達のトレーニングのための焦点として見なされていた。2名は、大学生活における1年目の年は幾ばくかでも全ての学生

達が平和学を通して活用出来るような類の経験を持つべきであるという関心を表明していた。

8. 結論

本調査を通して明らかに出来たこととして、かつての学生達による善意と大いなる関心が認められたことである。圧倒的な数に及ぶ意見は、卒業生達の教育経験においてこの平和学プログラムに価値があるということ、そして今後も更により野心的に継続するべきである、ということであった。回答者の中で約半数は、平和学が知的に視野を大きく広げる際に主たる要因となり、そしてその後職業の方向性を決める際に大いに役立ったと述べていた。多くの者にとっては、このこととマンチェスター大学における全体的な影響を分けて考えることが出来ないと述べていたが、しかし平和学は全体の経験において主要な要素 (a key element) としてみなされていた。ある者が述べるように、「マンチェスター大学は知的、そして精神的な欲望の始まりであり、幕開けであり、挑戦であり、そして自らを磨く場」であった。この学生は「大学での全ての経験において、その後の教育と平和へ献身は豊かなものになり、そして強固なものになっていった。このことは揺れることがない」と何度も繰り返し述べていたのである。

「今から考えてみると、この平和学プログラムは、ミューア教授を含めて考えていた方がいたように、数多くの学生達が国際関係の領域で職業を追求するだろう、ということは実現しなかったことは、相対的に明らかであったように思います。しかし、私はそれによってこの平和学プログラムに欠陥があったとは思いません。この平和学プログラムを経験した多くの人々は平和に深い関心を寄せ、そして教会やボランティア組織、または執筆活動

等を通して平和への努力のために積極的に関わっているのです。」

「平和学プログラムは人生のための哲学を技術よりも優先的に位置づけることで非常に友好的であると考えます。再び強調すると、この平和学プログラムにおいて私が出会った多くの仲間達は、それぞれの哲学を大いに変更したかもしれませんが、その優先順位は変わることはありませんでした。恐らくは、このことが人によってはフラストレーションが溜まる点だったと思います。つまり、哲学が常にテクニックやスキルよりも優先されていた、という点です。私はもしかすると、哲学で、教育で、そして恐らく大部分は神学における平和への関心ということは平和の部門で働くためである、としていたのでしょうか。しかしながら、私が信奉していた考え方のほとんどは、現在の私のものとは異なっています。これは、立場が変われば異なるということだけではなく、平和学が依って立っていた立場のためでもあると考えています。」

この書き手であり今は大学の教員をしている方は、演習におけるやり取りを通して (through seminar give and take) 立場が違う人々に対して各自の考え方を発展させるためにも批判的に考えるように教えられていたと示唆し、さらにこの考え方を分類化している。平和学は最も良い方法としてすべての時期に学生達にこれを試みていたのである。平和学の適切な目的がどうあるべきか、またどのようにすれば、各自が個々で選択をし、または自分自身のために働きかけ、どのような役割であったとしても最も良い形で学生達に準備させることが出来るのか、を巡って数多くの様々な考え方が存在している。ある者達は、ある特定の時代や教員集団が採った手段や強調点に関連してそれぞれの反応を巡って意見が合わないこともあるだろう。しかし、

ほとんど誰しも平和学プログラムが時間の無駄であった、または、我々共通の人類の諸課題を解決、ないしは少なくともそれらの解決のために奮闘するための手助けをする際に、世界のため、そして自らに重要な負荷をかけるというモチベーションのための関心を深めることに失敗したとは考えていなかったのである。

私達は、学生達がどのように自らの職業上の方向性や機会を見つけてきたのかというこの調査から、このことが大いに個人によるところが大きい、と結論づけなければならない。どのように卒業生達が自らの職業に就き、そしてそれらが教育や社会福祉、そしてそれらが教会の牧師のような明らかに関連する領域であったとしても、明確なパターンはないように思われる。平和学プログラムの最初の11年間ではしばしば選択されることが多かったこれらの領域だが、最近では減少しつつある。そして大学院や専門的な領域へと進むというパターンはよく整備されており、職業に関する面談も十分なものになり、そして容易に活用できるようになっている。他の領域の機会を探し求めている学生達にとっては、平和学プログラムが手助けできる領域は極めて限定的で、特に開設当初の模索の時期にはそうであった。現在では広範囲に渡る領域が開拓され、そして求人も増加しているが、しかし学生達の個々の関心や機会、そして更にはこれらの学生達による自主性をより追求できるように手助けするためにも、私達は更に働きを強める必要があるだろう。大多数の学生達にとって、大学院や専門的な探究が直接的に平和に関わる職業を選択する際には永続的な雇用にとって必要となっているように感じている。多くの学生達にとっては、大学卒業後、ないしは在籍中における論理的な次の一步は、平和部隊 (Peace Corps) や VISTA、そして教会や民間団体におけるボランティア活動であるように思う。そして多

くはこのことを理解し、そしてこのような方法で各自の職業を発見しようと努めてくれるだろう。このような奉仕を終えて、多くの学生達は大学院での専門領域を考える際に各々の真の関心事や方向性をより明確になるのである。

今後の教育や職業選択、そして平和学プログラムにおける学生達の準備における満足度という点で現在の傾向が継続していくかどうかに関して見極めるためにも、この調査を2、3年後にも大規模な事実に基づくデータを活用しながら引き続き継続することが望ましいと思われる。短期的な回答、つまり主要な長期休暇の時期に送って時間をかけて集めるよりも、ある時期に抽出調査をする方が高い回収率を得ることが出来るかもしれない (今回の調査は7月に依頼をして8月末までに回答を求めた結果、約50%の回収率であった)。回答の多くについて自由記述欄を基本として作成した形式について、今回の調査ではその特徴をつかめなかった点について、主要な情報を引き出すアンケート形式を採用することも一つの手だろう。何人かが述べてくれたように、平和学に関する感情の機微や数多くの示唆に富む評価や改善事項は、各自でこれまでの教育や職業探求という全ての経験を再び考えることを余儀なくされた結果として出てきたものであった。

この報告書で述べられた改善事項や評価に基づいて平和学プログラムの将来を容易に決定することはあるべき姿ではない。なぜならば、それらは首尾一貫したものではないからである。組織立てという課題を与えられた現在の平和学プログラムに関する委員会と、そして最終的にはプログラムを承認して実行へと移さなければならない教員と大学執行部が決定しなければならないのである。しかしながら、この調査の中で言及された反応や提案事項は、今後の平和学プログラムの方向性を指摘する過程の中で重要な役割を果たすこと

1948年から1970年までのマンチェスター大学平和学専攻の学生達のための教育ならびにキャリア開発について

になるだろう。

もしもこれまでの22年間という平和学プログラムの歴史の中での15年間で直接的に関わっている現在の平和学プログラム長として個人的な感想が許されるのであれば、私はこれらの評価や改善事項を大変挑戦的で刺激的だと考えている。平和学は、そのカリキュラムや教員、そして現在の学生達以上のものである (Peace Studies is more than its curriculum, faculty and current students)。それは、平和学を学び、そして平和学への応答として携わっている、今人類にとってより良い生を成し遂げようと働く人々すべてのものなのである。

(参考ウェブサイト)

AmeriCorps VISTA

<https://www.nationalservice.gov/programs/americorps/americorps-programs/americorps-vista> (最終アクセス日：2019年5月4日)